
“Genuineness”と純粋性をめぐる一考察 — Genuineなセラピストは人格者なのか—

A Study Concerning the Japanese Idealization of Carl Rogers' Genuineness

福島伸泰

関西大学臨床心理専門職大学院

Nobuyasu FUKUSHIMA

Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

本稿は、Rogers, C. R.によって提唱された純粋性 (genuineness) の概念が、国内の文献においてセラピストの人格や人柄といったことと関連づけられて論じられることについて、一つの考察を示すことを目的としている。本論では、原著を邦訳したことによる影響、実際のRogersその人と日本の読者のイメージするRogers像との差異、「省略されている重要なもの」(Significant Omissions) (Rogers 1957) が省略されることの影響の3つの観点から論考した。これらの結果、各々の観点からの影響が、純粋性 (genuineness) とセラピストの人格や人柄を関連づける要因の1つとなっている可能性が示唆された。なお、セラピストとしての成長の過程に伴う人間的・人格的な成長や成熟は重要であるが、純粋性 (genuineness) と関連づけられることで精神主義的内省といった誤解が生じかねないことから、「純粋性」と邦訳されている“genuineness”の意味するところについては、本論で得られた知見を含め、今後さらなる論考が待たれるところである。

キーワード：純粋性 (genuineness)、カール・ロジャーズ、中核条件 (core conditions)、
治療的人格変化 (therapeutic personality change)

Abstract

The purpose of this paper is to discuss how Carl Rogers' concept of genuineness became associated with an idealized personality and character in the context of some Japanese studies. In this study, the author considered 3 viewpoints that may have resulted in such idealization: the influence of Japanese translations, the difference between Rogers himself and the image of Carl Rogers among the Japanese readers, and the omission of a part of his paper (Rogers, 1957) entitled “Significant Omissions” in many Japanese textbooks on psychotherapy or counseling. These may have resulted in the image of genuineness as an ideal therapist personality and character. Although a genuine and growing therapist is important in humanistic psychotherapy, the

Japanese idealization of genuineness carries the danger of being misinterpreted as moral dogma. Therefore, the translation of genuineness requires further discussion including the alternative translations and arguments put forth in this paper.

Key Words: Genuineness, Carl Rogers, Core Conditions, Therapeutic Personality Change

問題と目的

はじめに

カウンセリングや心理療法において、クライアントに変化をもたらす要因は何であろうか。洞察を促すようなセラピストの切れ味の良い解釈であろうか、あるいはホームワークに取り組むクライアントの勤勉性であろうか。来談者中心療法の創始者とされる Rogers, C. R. (1902-1987) は、「The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change」(Rogers 1957) において、建設的なパーソナリティの変化に関わる 6 つの条件を提示した。この論文は、Rogers の著作をまとめた「ロージャーズ全集」(ロージャーズ 1966) 及び「ロージャーズ選集(上)」(ロージャーズ 2001) において、「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」との邦題で我が国にも紹介されており、特に共感的理解 (empathic understanding)、無条件の肯定的配慮 (unconditional positive regard)、純粋性 (genuineness) の 3 つの条件は、カウンセリングや心理療法に携わる者ならば、1 度はどこかで耳にしたことがあるだろう。

筆者自身は心理学を専攻していた学部時代の講義で初めてこの 3 つの条件を知った。記憶によれば、それは概論や概説といった、いわば入門編の講義の一部として大まかに説明がなされる程度であった。同様に、カウンセリングや心理療法の概説書を眺めれば、3 条件が抽出されて来談者中心療法が解説されていることは少なくない。そういった大まかな説明ではあったが、筆者にとって 3 つの条件のインパクトは絶大であった。直感的にはあるが、自身が関わろう

とする対人援助領域において、3 つの条件、特に純粋性が大切ではないかと感じた。また、大石 (2002) や羽間 (2004) などが述べているように、Rogers 自身も純粋性を最も大切だと考えていたことを後に知り、ますますその思いは強くなった。

その後、筆者は対人援助の現場に就労することになるが、純粋性を大切に思う気持ちは変わらず持ち続けていた。一援助者として、自身の内に迷いや葛藤が生じた際に、純粋性が支えや道標になることもあった。一方で、純粋性を実現するために具体的にどうしていけばいいのかという問いは、いつも心の奥底にあった。当時を振り返ると、正に諸富 (1997, p.213) が指摘するように、「純粋でいられたか」という「精神主義的な内省」を繰り返す日々であったように思う。そして、純粋でいられない自分は、援助者として、あるいは人間的・人格的に未熟なのではないかと感じるようになり、より人間的・人格的に成長・成熟しなければいけないという思いだけが強くなっていった。

このような状態に至った要因は、第一に筆者自身の無学さにあることは言うまでもない。しかし、純粋性などの来談者中心療法の理論や概念を援助者の人間性や人格・人柄といったことに関連させる考え方は筆者特有のものではない。例えば、東山 (2003) は Rogers の理論に基づく心理療法の進展は「ひとえにセラピストの人格にかかっている」(p.19)、来談者中心療法のセラピストは「人格を鍛える必要がある」(p.17) と述べている。また、岸田 (2007, p.17) は、純粋性を含む 3 つの条件の基盤として、セラピストの「人間観、人がらがきちんと育っていること」の大切さを指摘している。同様に、

羽間 (2004, p.135) も、純粋性を高度に保つためには、セラピストの「人間観や価値観」といったことが問題となってくると述べている。

しかし、Rogers 自身が“genuineness”をセラピストの人格や人柄といったことと関連づけて考えていたかどうかについては議論の余地があると思われる。少なくとも、Rogers (1957) においては、そういった指摘はない。なお、付記しておくが、筆者も一援助者としての成長のために人間的・人格的な成長や成熟は不可欠なものだと考えている。しかし、セラピストの人格や人柄といったことを、純粋性と関連づける考え方は、日本独自のものと思われる。本稿では、こういった日本独自の純粋性観について、以下の3つの観点から論じる。1点目は原著を邦訳したことによる影響、2点目は実際の Rogers その人と我々のイメージする Rogers 像との差異、3点目は「省略されている重要なもの」(Significant Omissions) (Rogers 1957) が省略されることの影響、以上の観点から本論を展開する。

なお、本稿で用いる人格という単語は、“personality test”を人格検査と邦訳するような、いわゆる心理学用語としての人格 (パーソナリティ) ではなく、一般的意味として国語辞典 (旺文社国語辞典、第十一版、旺文社) に挙げられているような「人柄」や「人の品性」、あるいは「自律的・道徳的な行為の主体としての個人」といった意味で用いていることを付記する。

本論

1. 邦訳の影響

“邦訳を読んだ後に原著を読んだら、別なもののように感じられた”といった原著と邦訳の違いに関する指摘は、文学者や作家など多くの先人によってなされてきた (岸田 1990 など)。また、カウンセリングや心理療法に関しても、岡村 (2007) や藤山 (2010) は原著を講読する重要性を指摘している。“genuineness”について

も、邦訳の影響を検討するため、原著である Rogers (1957) 中の「The Therapist's Genuineness in the Relationship」の項について再訳を試みた (以下、試訳と略記)。その上で、邦訳版として国内で出版されている「ロージャズ全集」(ロージャズ 1966) (以下、全集と略記) 及び「ロジャーズ選集 (上)」(ロジャーズ 2001) (以下、選集と略記) の当該部分との比較を行った。なお、当該部分の抜粋引用箇所については、原著・全集・選集・試訳の順に記載する。

The Therapist's Genuineness in the Relationship
全集：関係におけるセラピストの純粋性
選集：関係のなかでのセラピストの純粋性
試訳：関係におけるセラピストの誠実さ

The third condition is that the therapist should be, within the confines of this relationship, a congruent, genuine, integrated person.

全集：第3の条件は、セラピストが、この関係の範囲内では、一致した (congruent)、純粋な (genuine)、統合された人間でなければならない、ということである。

選集：第3の条件は、セラピストは、この関係の範囲のなかで、一致して (congruent) おり、純粋で (genuine) あり、統合している (integrated) 人間でなければならないということである。

試訳：第3の条件は、セラピストが、この関係の範囲内では、一致した、誠実な、統合された人間であるべきだ、ということである。

引用したのは、項題を含めた冒頭部分である。この中で取り上げたいのは“genuine”及び“genuineness”の訳語についてである。これらの英単語に対して、全集・選集ともに純粋、純粋性という訳語が充てられている。

まず、日本語の純粋という単語の意味を改めて見ていきたい。国語辞典 (旺文社国語辞典、

第十一版、旺文社)によれば、「①まじりけのないこと、またそのさま」、「②邪念や私欲のないこと、またそのさま」、「③ひたすら一つことに集中すること。また、そのさま」の3つが意味として挙げられている。また、各意味の例示として、①「純粋培養」、「純粋な水」、②「若者の純粋な心」、③「純粋に芸術の立場で接する」とある。興味深いのは、人の心や立場といったことについては、②や③の意味と結びついているという点である。例えば、純粋な人というイメージを浮かべるときに、おそらく我々は②や③の意味においてその人物像を思い浮かべることが多いのではないだろうか。また、純粋無垢といった表現にも代表されるように、純粋という単語は人と結びつくと、邪念や私欲のなさ、偽りや裏表のなさ、清廉潔白、高潔、あるいは一途、忍耐強い、一生懸命といった、模範的あるいは理想的な人物像のイメージを運びやすい傾向があるのではないだろうか。

次に“genuine”の意味を見ていきたい。英英辞典 (*Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition, Pearson Education Limited)によると、「1 a genuine feeling, desire etc is one that you really feel, not one you pretend to feel [SYN] sincere」、「2 something genuine really is what it seem to be [SYN] real」、「3 someone who is genuine is honest and friendly and you feel you can trust them [OPP] false」の3つが常用の意味として挙げられている。ここで、純粋と同じようにして“genuine”について見てみると、1と3の意味が人の“feeling”や“desire”、あるいは人である“someone”と結びついていることが分かる。1は、自分が本当に感じていて、感じている振りではない“feeling”や“desire”といったことを意味し、3は、人物が“honest”であり、また“friendly”であり、信頼できるといった意味である。この意味を、前述の純粋の意味や純粋が人と結びついた際のイメージと比較してみると、両者に重なる部分がある一方で、大きな違いが

生じていることも分かる。

両者とも、裏表のなさ、偽りのなさという点においては共通する部分があると捉えられるが、純粋という単語が人と結びついた際には、邪念や私欲がなく、清廉潔白、高潔、あるいは忍耐強く、一生懸命といったイメージを帯びるのに対し、“genuine”という英単語は、その人が感じたそのままの“feeling”や“desire”、あるいは人が“honest”かつ“friendly”で信頼できるというところを意味する。それは純粋のイメージにあるような、模範的あるいは理想的な人物像を備えた、いわば人格者と称されるような人ではない。Rogersが意図した“genuine”と、純粋という単語からイメージされる人物像は異なる可能性がある。

では、“genuine”の訳語として何を充てることが適切であろうか。英和辞典 (ジーニアス英和辞典、第4版、大修館書店)において、“genuine”の訳語を確認してみると、「①〈物が〉本物の (real)、にせ物でない」、「②〈感情・人などが〉心からの、真の、見せかけでない；誠実な」、「③〈血統が〉純粋な；〈動物が〉純 (血) 種の」の3つが一般的意味として挙げられている。筆者は、この中から「誠実な」を訳語として採用した。誠実は「ことばや行動に真心がこもっていること。また、そのさま」(旺文社国語辞典、第十一版、旺文社)、「真心があること。偽りなく、まじめなこと」(集英社国語辞典、第3版、集英社)であり、偽りのなさという前述した両者の共通点を含むとともに、“honest”や“friendly”に近いニュアンスとして、「まじめ」や「真心がこもっている」といった意味も含まれている。よって、試訳においては、“genuine”を誠実な、“genuineness”を誠実さと邦訳した。

It is the opposite of presenting a facade, either knowingly or unknowingly.

全集：それは、意識的にせよ無意識的にせよ、表面的なものだけを表現することの反対なのである。

選集：それは、意識的であれ無意識的であれ、仮面をかぶることの正反対である。

試訳：それは、知ってか知らずのうちに、格好をつけることとは対照的なものである。

(中略)

If the therapist is not denying these feelings to awareness, but is able freely to be them (as well as being his other feelings), then the condition we have stated is met.

全集：セラピストが、このような感情を自分の意識に否定しないで、自由にそうあることができるならば（もっと別の感情であってもよい）、われわれの述べている条件は満たされているのである。

選集：もしセラピストがこうした感情を自分の意識に否定しないで、自由にその感情のまま（ほかの感情でも同じだが）でいることができるならば、私たちが述べた条件は満たされているのである。

試訳：セラピストが、このような気持ちを気付きのうちに否認しないで、自由に（気持ちに）なってみる（他の気持ちにもなってみる）ことができれば、われわれの述べている条件は満たされている。

ここで注目したいのは、意識・無意識という訳語が登場している点である。前段では、“knowingly”と“unknowingly”に対して、意識・無意識という訳語が充てられている。また後段では、“awareness”に対して、意識という訳語が充てられている。

意識・無意識という用語から連想されるのは、Freud, S. の局所論に代表されるような精神分析理論の概念であるが、馬場（2008）が述べるように、無意識やその中にある感情や欲求といったものは、自分で自覚したり、感じたりすることは出来ないものである。この点に関して、選集・全集の訳者の1人である伊東博は、別著の中で以下のように述べている。純粋性とは、

「カウンセラーの今、現実を感じている感情が、抑圧されたり、歪曲されたり、合理化されたりしないで（防衛されないで）、その感じられていままに、彼に意識されているということである」（伊東・杉溪・坪上 1968, p.59）。また、伊東（1995, p.133）においては、カウンセラーがクライアントに対して「否定的な感情」を感じたとしても、「それを自分の意識に否定しない（防衛しない）で、自由にその感情に気づいている」のであれば、純粋性という条件は「みだされているといってよいであろう」と述べている。抑圧・歪曲・合理化・防衛といった精神分析理論に基づく用語が多数登場しており、伊東が精神分析理論の概念を駆使して、Rogers のいう“genuine”や“genuineness”を理解しようとしていたことが伺える。

しかし、伊東のような精神分析理論に基づく主張をしようとするのであれば、Rogers は“conscious”、“unconscious”、あるいは“consciousness”、“unconsciousness”“という単語を用いるのではないだろうか。実際に Rogers（1957）の「The State of the Client」の項においては、“conscious”、“unconscious”という単語を用いて記述がなされている。

このことを鑑みて、筆者は試訳において、前段の“knowingly or unknowingly”を「知ってか知らずのうちに」と訳し、後段の“awareness”には「気付き」という訳語を充てた。これにより、セラピストは自分では自覚することが困難な無意識と格闘する存在ではなくなる。

また、後段で筆者は“feeling”に「感情」ではなく、「気持ち」という訳語を充てた。“feeling”には、悲しみや喜びといった感情のみならず、「感覚」や「感じ」といった意味（ジーニアス英和辞典、第4版、大修館書店），“something that you feel in your body”（*Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition, Pearson Education Limited）といった意味もある。辞書の意味においても、この幅広い意味を包含する単語としては「気持ち」が適切である

と判断した。また、純粹性は、喜びや悲しみといった名前が付けられるような感情を感じ取るのみならず、諸富 (1997, p. 209) が述べるような「クライアントから「感じとっていること」やクライアントとのかかわりにおいて自分の中に生じてくる「感じ」に忠実に動いていけること」であり、身体感覚や〇〇な感じといったものも含め、より幅広いセラピスト自身の体験が含まれていると考えられ、この点からも「気持ち」の訳語が適切ではないかと考えた。

さらに、従来の邦訳に従えば、セラピストは自らの意識・無意識といった次元においてまで、自身の態度を吟味することを求められたわけで、そのためには精神分析家志願者が受ける教育分析のような訓練を以って、「自分自身の性格のもっとも目立たない弱点まで自覚し、統制する必要がある」(羽下・一丸・名島 1998, p. 277) ということになる。しかし、上記で示したように、Rogers が意図していたのは、このようなことではない可能性がある。

2. Rogers と Rogers 像

久能 (1984) は、Rogers について、「グイグイと他人に迫っていくことはむしろ非常に苦手な人で、どちらかと言えば、相手を先ず受け止める、といったタイプの人であるように思える」と述べている。筆者も同感である。Rogers はどんな人だったと思うか? と筆者の周囲の学生に尋ねてみても、「落ちついた人」、「優しい人」、「あたたかい人」などの回答で、イメージする Rogers 像のベクトルは概ね同じ方向のようである。

こういった Rogers に対するイメージ、いわば Rogers 像は 2 つの側面から考えることができる。1 つは、実際の Rogers 個人が、我々がイメージするような人柄や性格を兼ね備えた人物であったという側面からである。この点について、残念ながら筆者にはそれを直接確かめる術はないが、実際に Rogers と相見えた人々が同様の印象を語っている記述が存在する。Rogers

と個人的関係のあった小谷 (2003, pp. 271-272) は、Rogers を「厚温なおじいさん」と表現し、Rogers との「パーソナルな関係」において「彼の genuine な人としてのあり方」を学んだと述べている。また、実際に Rogers の講演会を聴講した村瀬 (2003, p. 259) は、「平易で明快な語り口からは淡々としているが、言葉の背後から人間存在への畏敬と事実と素直に直面する姿勢が伝わってきた」と述べている。さらに、Rogers の元で学んだ東山 (2003, p. 35) は、「ロジャーズに教えられたことは、人間性であり、ハートであった」と振り返っている。Rogers その人が、我々がイメージする Rogers 像に近い特性を備えていた、あるいは日本において人格者と呼ばれるような人物であった可能性は大いに存在する。

もう 1 つの側面は、我々が Rogers の理論や実践に関する情報を媒介として、自分なりの Rogers 像をイメージしたり、創造したりしているという側面からである。この点について、Rogers の元へ留学経験のある佐治守夫は、Rogers の理論が日本国内で普及し始めた当初の時期を、以下のように振り返っている。「ロジャーズの考え方の中心的なセラピー理論やパーソナリティ理論が十分理解されぬままに、人間性の性善説に代表されるような、暖かい雰囲気とか、心地良い穏やかさといった、望ましいと日本人が考える漠然とした空気が、これも日本的な対人関係の親和性をよしとする風土と結びついて、何とはなし親しみやすい考え方としてうけとられた感じがあった。ロジャーズの数度の来日や、アメリカへの留学で彼と接触した数少ない人たちだけが、彼の唱える臨床の科学の論理性・合理性を学んだ」(佐治 1996, p. 289)。また、同じく畠瀬 (2000, p. 39) は、Rogers の元に数か月滞在した経験から、実際の Rogers と「日本でのロジャーズ理解とのギャップ」を指摘している。これらの指摘は、Rogers 理論の日本での理解や普及の仕方について述べたものであるが、別な側面から見れば Rogers と実際に直

接的な関係を持った者と、そうでない者には何かしらの違いが生じることを示しているとも言える。

氏原（2000, p.2）は、Rogers と実際に関わる機会を持った「第一世代のロジェリアンたち」について、「その後、多かれ少なかれロジャーズと距離を置くようになった」と述べているが、その代表に挙げられるのが、Rogers の理論を日本に普及させることに尽力した友田不二男であろう。友田は、「ロージャズとの出会いと私の歩み」（友田 1970）と題した論考において、自身が Rogers の理論に魅せられた過去を振り返りつつも、「カールはカールであって私ではなく、私は私であってカールではない」と複雑な心境を記している。また、同論考には、Rogers と相見える機会が2度あったが、その最中に交わした再面会の約束が2度も Rogers 側の事情でキャンセルとなってしまった出来事が「それは一応それとして」としながらも、述べられている。

おこがましい話かもしれないが、Rogers も一人の人間であるという点においては、我々と何ら変わりはない。例えば、間違うこともあれば、誰かを傷付けることもあったかもしれない。しかし、前述した Rogers 像にそういったイメージはどれだけ含まれているだろうか。もし Rogers 像に、パーフェクトなセラピスト、いわば聖人君子的なイメージが多分に含まれているのだとするならば、それは、東山（2003, p.5）が述べるような心理療法の理論には「セラピストの人格が大きく反映される」といった考えを媒介として、セラピストの人格や人柄といったことを、純粋性と関連づける考え方の一因となり得るのではないかと考える。

3. 省略されてしまう「省略されている重要なこと」 (Significant Omissions)

Rogers (1957) の後段に登場する「Significant Omissions」は、全集（1966）において「省略された重要なこと」、選集（2001）において「省略されている重要なこと」と邦訳されている。こ

の中で Rogers は、自身が示した6つの条件について、いくつかの特質を挙げている。以下はその抜粋である。なお、当該部分の邦訳に関しては、全集を改訂した選集が適切と判断し、選集の邦訳を採用した。

It is not stated that these six conditions are the essential conditions for client-centered therapy, and that other conditions are essential for other types of psychotherapy.

選集：これら六つの条件はクライエント・セントラード・セラピーの基本的条件であるとか、他のタイプのサイコセラピーには他の基本的条件が必要である、ということは述べられていない。

(中略)

It is not stated that psychotherapy is a special kind of relationship, different in kind from all others which occur in everyday life.

選集：サイコセラピーは、日常生活のなかに起こる他のすべての人間関係と種類の違う、特別な人間関係であるとも述べられていない。

これらは何を意味しているのでしょうか。まず重要な点は、伊東（1995, p.128）などが指摘しているように、純粋性を含む6つの条件は来談者中心療法の「技術」や「やり方」ではないということである。この点については、岡村（2007, p.29）において、Rogers (1957) は「精神分析や指示的カウンセリングの解釈や指示という技法に対するアンチテーゼ」としての「技法」が述べられているのではなく、「それらをも包含する治療者の基本的なありよう、精神分析や行動療法と並列する第3勢力ではなく、それらにおける治療者の基盤ともなる心理療法基礎論が言われている」と解説されている。つまり、技術や技法といった“doing”が異なる様々な流派のカウンセリングや心理療法においても、あるいは日常の人間関係においても、純粋性を含む6つの条件である態度やあり方という“being”

が成立していれば、クライアントや相手の人物に建設的なパーソナリティの変化は起こるといえるのが Rogers の主張である。

しかし、Rogers (1957) や来談者中心療法に関して論じている文献や書籍のうち、どれだけがこの点を取り挙げて明確に記述しているだろう。特にカウンセリングや心理療法全般の概説書においては、6つの条件のうちの3条件が抽出され、それらは「態度」であると表記されているが、技術や技法ではないことが明確に表記されていないものも存在する。例えば、馬場 (2001, p.41) は「カウンセラーが自己一致の態度を保ち、共感的、肯定的に聴き、理解したことを伝え返すことを続けて行けば、クライアントはおのずから成長し、自分の人生を選択していくことができるというのが、クライアント中心療法の考えである」と述べている。このような記述だけを見れば、“being”を“doing”と取り違える可能性がないとは言いが切れない。

ここで、より分かりやすく論じるため、河合 (1970) における例示を取り挙げる。河合は、Rogers の3つの条件について、野球に準えて解説している。野球においてヒットを打つための条件が「確実にミートする」、「力いっぱい振る」、「野手のいないところに打つ」の3つであるとする。この条件を指導され、その必要性を理解した上で試合に出場した選手であったが、あいにくヒットを打ちそこなってしまった。その後、指導者からは「ジャストミートしていないから、今度はジャストミートするように」との指導を受けた。しかし、選手は「それだけではどうしていいのか分からなくなってくる」。

例えば、選手をセラピストに、指導者をスーパーヴァイザーに、「ジャストミート」を純粋性に置き換えてみればどうであろうか。具体的にどこをどうしたらよいかという“doing”の問題に対して、とにかく純粋でありなさいという“being”に答えを求めることは、先に挙げた諸富 (1997, p.213) が指摘するような「精神主義的な内省」を一層混乱させる事態に陥ることは明

らかではないだろうか。

そして、このような取り違えや誤解の上に、否が応でも突き当たってしまう限界を乗り越えようとする苦渋の選択が、セラピストの人格や人柄といったことを3つの条件と関連づける、さらに言えば純粋性の拠り所とする考え方の一因となる可能性があるのではないかと考えられる。例えば、東山 (2003) は、Rogers の理論には「技法論がない」(p.24) とした上で、「来談者中心療法のセラピストにとって、一番大切なことは人格である」(p.54) としており、また、同著内で杉野 (2003, p.63) は、「純粋性」的態度の深化を目指し続ける限り、セラピストの人格も成熟し続けると述べている。

繰り返しになるが、先に述べた通り、筆者も一援助者としての成長のために人間的・人格的な成長や成熟は不可欠であることに異論はない。しかし、それを純粋性と過度に関連づけてしまうと、Rogers の理論を活かそうとするセラピストは、優れた人柄で、一点の曇りもない人格者でなければならないといった図式を生んでしまうことになるだろう。こうなってしまうと、技術や技法が異なる様々なカウンセリングや心理療法における共通の態度としての条件を見出し、それを理論化した Rogers の意志は活かされないのではないだろうか。

まとめと今後の展望

以上、3つの観点から、セラピストの人格や人柄といったことと純粋性を関連づける日本独特の純粋性観について論じてきた。英語と日本語という言語の壁は大きく、そもそも人柄や人格者という日本語の概念について、同じような意味の言葉が英語に存在しないことからそれは明らかである。加えて、実際の人物と希望や願いも込められたイメージとの差異、文献全体を捉えた上で概念を理解することの難しさ、そのどれもが相互に関係し合い、日本独自の純粋性観の一因となっている可能性がある。また、

今回取り上げた3つの要因以外にも、日米の様々な歴史や文化、慣習や価値観の特徴や差異などが関連している可能性が示唆される。この点については、本来の“genuineness”の意味するところは何かということ視座に据えて、さらなる論考が待たれるところである。

また、最後にセラピストの人格や人柄といったことについて触れておく。本論中でも再三触れているとおり、筆者は対人援助職にとって人間的・人格的な成長や成熟といったことは重要であると考えている。また、村瀬・青木(2000)や飯田(2008)、諸富(2010)などにおいてもその重要性は指摘されているところである。ただし、それを純粋性と関連づけて成し遂げようとするのは、筆者が体験し、諸富(1997)も指摘するような精神主義的内省に繋がっていく可能性が高い。しかし、本論で述べたように、これはRogers本人が意図したところではないだろう。その意味では、Rogers本人がセラピストの人的成長や、日本でいうところの人格的成熟のようなものをどのように考えていたかについても、論考が待たれるところである。

日本において、様々な純粋性の概念と出会ってきた10余年、今“genuineness”とは何なのか、改めてRogers本人が意図したところに立ち返る必要性を感じている。そして、これから先の10年で筆者の純粋性観はどのように変化していくのだろうか。一援助者としての人的・人格的な成長や成熟を一步一步積み重ねていくことと共に、“genuineness”を遺してくれた大先輩Rogersからの宿題なのかもしれない。

謝 辞

本稿の執筆に当たって、厚いご指導を賜りました関西大学臨床心理専門職大学院の池見陽教授に深く感謝申し上げます。また、貴重なご意見を頂いた井野めぐみさん、笈愛さん、羽田野瑛子さん、山田理央さん並びに同級生の皆様、博士課程の方々に感謝申し上げます。

文 献

- 馬場禮子(2001):カウンセラーの態度 馬場謙一・橘玲子(編)『カウンセリング概説』財団法人 放送大学教育振興会 pp.38-48.
- 馬場禮子(2008):『精神分析的人格理論の基礎』岩崎学術出版社.
- 藤山直樹(2010):『集中講義・精神分析 下 フロイト以後』岩崎学術出版社.
- 羽間京子(2004):治療者の純粋性について—非行臨床から得られた知見 村瀬孝雄・村瀬嘉代子(編)『ロジャーズ クライアント中心療法の現在』日本評論社 pp.130-142.
- 羽下大信・一丸藤太郎・名島潤慈(1998):スーパーヴィジョン、事例検討会、個人分析 一丸藤太郎・名島潤慈・山本 力(編)『精神分析的心理療法の手引き』誠信書房 pp.254-281.
- 畠瀬 稔(2000):ラホイヤ時代のロジャーズ 氏原 寛・村山正治(編)『ロジャーズ再考—カウンセリングの原点を探る』培風館 pp.37-56.
- 東山紘久(2003):『心理療法プリマーズ 来談者中心療法』ミネルヴァ書房.
- 飯田昭人(2008):治療者の人間性・人間観が心理療法におよぼす影響について『大正大学カウンセリング研究所紀要』31:19-27.
- 伊東 博・杉溪一言・坪上 宏(1968):『部下を生かす カウンセリングの技術』ダイヤモンド社.
- 伊東 博(1995):『カウンセリング [第4版]』誠信書房.
- 河合隼雄(1970):日本における心理療法の発展とロジャーズ理論の意義『教育と医学』18(1):11-16.
- 岸田 博(2007):『来談者中心カウンセリング私論 改訂版』道和書院.
- 岸田國士(1990):翻訳について 田中千禾夫・中村真一郎・古山高麗雄・矢代静一(編纂)『岸田國士全集 22 評論随筆4』岩波書店 pp.297-299.
- 小谷英文(2003):Genuine Rogers 村山正治(編)『[現代のエスプリ別冊]ロジャーズ学派の現在』至文堂 pp.270-273.
- 久能 徹(1984):ロジャーズとロジャーリアン(Ⅲ)『臨床心理学研究』22(2):69-76.
- 諸富祥彦(1997):『カール・ロジャーズ入門—自分が“自分”になるということ』コスモス・ライブラリー.
- 諸富祥彦(2010):『はじめてのカウンセリング入門(上)—カウンセリングとは何か』誠信書房.
- 村瀬嘉代子・青木省三(2000):『心理療法の基本—日常臨床のための提言』金剛出版.
- 村瀬嘉代子(2003):カール ロジャース、「個性性と普遍性」村山正治(編)『[現代のエスプリ別冊]ロジャーズ学派の現在』至文堂 pp.258-261.
- 岡村達也(2007):『カウンセリングの条件—クライアント中心療法の立場から』日本評論社.
- 大石英史(2002):ロジャーズ「自己一致」再考—私に与ったクライアント中心療法— 村山正治・藤中隆

- 久 (編) 『クライアント中心療法と体験過程療法—私の実践との対話—』 ナカニシヤ出版 pp.56-70.
- Rogers, C. R. (1957): The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. *Journal of Consulting Psychology*. 21(2): 95-103.
- ロージャズ、C. R. (1966) : 伊東 博 (訳) セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件 『ロージャズ全集 4 サイコセラピーの過程』 岩崎学術出版社 pp.117-140. Rogers, C. R. (1957) The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. *Journal of Consulting Psychology*. 21(2): 95-103.
- ロジャーズ、C. R. (2001) : 伊東 博 (訳) セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件 『ロジャーズ選集 (上) —カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選 33 論文』 誠信書房 pp.265-285. Rogers, C. R. (1957) The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. *Journal of Consulting Psychology*. 21(2): 95-103.
- 佐治守夫 (1996) : 『カウンセラーの〈こころ〉』 みすず書房.
- 杉野要人 (2003) : 自分を殺すことから生かすことへ 東山絃久 (編著) 『心理療法プリマーズ 来談者中心療法』 ミネルヴァ書房 pp.63-83.
- 友田不二男 (1970) : ロジャーズとの出会いと私の歩み 『教育と医学』 18(1) : 51-56.
- 氏原 寛 (2000) : 共感的理解と診断的理解 氏原 寛・村山正治 (共編) 『ロージャズ再考—カウンセリングの原点を探る』 培風館 pp.1-16.
- 辞 典**
- ジーニアス英和辞典、第 4 版、大修館書店 (2006)
- Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition, Pearson Education Limited, Harlow (2009)
- 旺文社国語辞典、第十一版、旺文社 (2013)
- 集英社国語辞典、第 3 版、集英社 (2012)